

---

# コードギアス 質問する軍人？

RYUZEN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コードギアス 質問する軍人？

### 【Nコード】

N9681V

### 【作者名】

RYUZEN

### 【あらすじ】

『コードギアス 反逆しない軍人』のキャラクター達が一堂に集結する。開かれるのは質問コーナー。そして暫しの別れ。

## （前書き）

注意事項！

- ・ シリアスなんて欠片もありません
- ・ ネタバレ多数
- ・ 独自解釈無限大
- ・ 強力若本
- ・ メタ発言連発
- ・ ツツコミに定評のあるスザク
- ・ 謎のクロスオーバー
- ・ そーなのかー

などなどが含まれますので、上記のことが不愉快な方は戻るをクリックして下さい。

以下の事はノープロブレムな方はご覧ください。

スザク「さて、読者の皆様。漸く始まりました『コードギアス 質問する軍人?』! この企画は題名通り『反逆しない軍人』の設定やキャラクターに対するあれこれを質問して、それをキャラクターが応えるコーナーです。視界はこの僕、枢木スザクと!」

皇帝「神聖ブリタニア帝国第九十八代皇帝、このオシャルル・ジ・ブリタニアがお送りする! オール・ハイル・ブリタニアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!」

スザク「えっ!? な、なぜ皇帝陛下がここに……」

皇帝「ほう、お前のような一皇族の専属騎士風情が、この神聖ブリタニア帝国第九十八代皇帝に意見すると! そういう事でいいのかベリイイイメロンツ!」

スザク「も、申し訳ありません! ただ自分は」

皇帝「ぶるああああああああああああああああああああああああああああああ!」コウティキツクツ

スザク「ぶべらっ!」

皇帝「この軟弱ものがあああああああああああああッ! そのような事でエ、我が娘ユーフェミア・リ・ブリタニアの夫として、我がブリタニア一族の末席に加わろうなどとは片腹痛いわア!」

スザク「そんなお義父さん!」

皇帝「貴様にお義父さんと呼ばれる筋合いなどないわアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアああ!!」コウテ  
イパンチッ

スザク「ごおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

皇帝「その程度で倒れるとは情けない。原作で我が騎士としてラウ  
ンズの末端に加わったとは思えん貧弱っぷりよ」

スザク「いえ、壁が挟れてるんですが……」

皇帝「文句があるのか、枢木い?」

スザク「滅相ありませんっ!」

皇帝「よいか枢木。この世は所詮、弱肉強食……」

スザク「それ違う人のセリフじゃ」

皇帝「ぶるああああああああああああああああああああ!  
他人のセリフは、この儂の台詞だのだからああああああああああ  
ああ。そのような事すら理解せんから、日本は一か月で我がブリ  
タニアに膝を屈したのだからあああああああああああああああ  
あああああああ!」

スザク「絶対に関係ないと思います」

皇帝「競い争い奪い合い支配する。その果てに未来があるッ! オ

オオル・ハイル・ブリタアアアニアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
「」

スザク「おーる・はいる・ぶりたにあ？」

皇帝「声が小さいイ！ もう一度だ！！」

スザク「オオオオオオオオオオオオオオオオハハイイイイ  
イイイイイイイイイルブリタアアアアアアアアアア  
アアアニアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

皇帝「ふん。まあ及第点といったところだな」

スザク（もう嫌だこの職場……。ラウンズの人達でこんな人が上司でよくやっていけたな。レナード、尊敬するよ）

皇帝「何か言ったか？」

スザク「いえ何も……、そ、それより陛下。そろそろ本題に……」

皇帝「そうだったな。その枢木が言った通り、これはメッセージボックスに寄せられた質問に『反逆しない軍人』に登場したキャラクター達が応えるというものだ。尤も、送られてきたメッセージの半分はこの儂に対するファンレターであつたが」

スザク（ここで噓だッ！　とか言ったら怒るんだろーなー。本編に出番がちよつと足りなかったからといって司会なんて買って出るんじゃないかった）

皇帝「では記念すべき最初の質問は

」

【最終話でレナードが超長距離射撃をしています、地球の丸みとか障害物とかはどうなっているのでしょうか？】

スザク「むむむ、中々むつかしい質問ですね」

皇帝「なにが むむむ だ！」

スザク「えっ、陛下は分かるんですか？ メカニックのこと」

皇帝「この愚か者が。そのような雑事は皇帝の責務ではない。国家の技術を担うべきは無論、技術者であるべきこと、故に」

主任「私の出番ですね」

スザク「しゅ、主任さん！？ 何故こんな所に」

主任「何故も何も、マーリン・アンブロジウスの開発者として、この質問に答えるべきなのは私でしょう」

スザク「確かに」

皇帝「ふむ。してどうなのだ、主任。120kの超長距離射撃はいいが、もし現実にこんな真似をすれば、地球の丸さもあって命どころか目標地点の視認すら不可能であろう？」

主任「はい。……実を言うとこの『マーリン・アンブロジウス』には面白いシステムがありまして……技術的なあれこれを一から説明すると原稿用紙百枚分になるので語りませんが、結果だけ言うならマーリンのスナイプハドロンは地球の重力に従い微妙に曲がるのです」

皇帝「成程。それなら当てるのも不可能ではないな」

スザク「でも主任さん。確かにそれなら超長距離までスナイプハドロンを飛ばす事は可能ですけど、目標地点の視認までは無理なんじゃない……」

主任「その通り。その問題があるからこそ、これはレナード閣下専用機なのです」

スザク「つまり……どうということだってばよ？」

主任「ワイアードギアスで見えない場所に目標を定めて撃つてる訳です。こう見えて私もギアス嚮団に所属していた経緯もありますし、ギアスユーザー専用機の調整もしましたら、閣下のギアス能力に適合した機体を作るのも可能でした」

スザク「そんな経緯が……」

皇帝「では主任よ。もし我が騎士レナード以外が騎乗したならば、マーリン・アンブロジウスはどうなるのだ？」

主任「第十世代KMFですので、そうですね。一人で騎乗した場合でもランスロット・アルビオンや紅蓮聖天八極式と同程度の性能は



あるかと。ただ単体では第十世代KMFとしての性能も発揮できませんし、アーサーの騎乗したガウェイン・ロイヤリティーには勝てません」

皇帝「ままならぬものよ」

【反逆しない軍人のフランカについての質問です。

- ・自身最後の誕生日に貰ったものは何ですか？
- ・自身最後の父の日には何を送りましたか？
- ・犬と猫、どっち派ですか？】

皇帝「これは明らかに本人を呼んだ方が早いな」

スザク「そうですね。それじゃあフランカさ  
って  
どうしたんですか!？」

フランカ「うう……第一部のちょこつとしか出番のない私にも、し  
っかりとファンはついていたんだと思うと……嬉しくて」

レナード「言葉にできないのか？」

スザク「えっ、レナード？」

レナード「

スザク「おかしいな。確かに声が聞こえたのに」

レナード（悪いな。俺には色々と準備があるからな。ここは失礼させて貰う）

皇帝「さてフランカとやらよ。お前の数少ないファンの質問に答えてやるといい」

フランカ「はい……ってお前はブリタニア皇帝！ 貴様が私の祖国を……」

皇帝「こういう場だ、流せ」

フランカ「むっ。確かにこういう場だからな。気にしても仕方ないか」

スザク（いいのかな、それで？）

スザク「さてさて気を取り直して、フランカさん。」

フランカ「そうだな。私は犬猫両方愛でるタイプだ。そこに犬猫がいるから愛でる。それが人間の真理だな」

スザク「ちなみに好れますか？」

フランカ「んー、普通だと思う」

スザク「ふっ、そうですか」

スザク（僕はいつも片思いだからな。両想いになっても義父があれだし、義姉はシスコンだし）

フランカ「最後の誕生日に貰ったのは……イヤリングだ。流石に従軍している時はつけていなかったけど、片時も離さず持っていた。逆に父の日にあげたのは包丁だな。ああ見えて料理が趣味なんだよお父さん。後は父の日だから薔薇、かな」

皇帝「……………僕は子供達から何も貰ったことない」

スザク「自業自得です」

オデュッセウス「自業自得ですね」

シュナイゼル「悲しいですね父上」

コーネリア「自業自得というものです」

ユーフェミア「虐殺DEATH」

ルルーシュ「自業自得だッ！」

クロヴィス「出番、くれ」

ナナリー「いい加減にしる馬鹿親子」

皇帝「――、――」

マリアンヌ「あらやだ可愛い」

スザク「駄目だこいつ…早くなんとかしないと……」

【ジェレミアがナイトオブツーに任命されていますが、洗脳されていたとはいえ、直前まで戦っていた人間をラウンズにして大丈夫なんでしょうか？】

スザク「なんというか奇遇だな。これ第二部で僕がレナードにした質問と似てる。それで、どうなんですか陛下。一体ラウンズに選ばれる基準とかってあるんですか？」

皇帝「基準？ そのようなもの僕の目に留まるか留まらぬかだ。それ以外にない」

スザク「……………あの、それじゃ質問に応えた事には」

ルル「ではダメ親父に変わり第九十九代皇帝である俺が応えよう！」

スザク「あつ、ルルーシュ！」

ルル「そう俺だ。原作の主人公であり、ナイトメア・オブ・ナナリーにおけるダークヒーローであり、本作品においても第二の主人公である俺、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアだ」

スザク「……………三月の完結以来、全く出番がなかったせいでキャラが変なことになってるね」

ルル「何か言ったかスザク？」

スザク「いや、何も」

ルル「それで何故俺がジェレミアをラウンズ、しかもレナードの後釜であるナイトオブツーに任命したかという話だったな？　なら理由は簡単だ。最終決戦前、レナード自身に推薦されてたんだよ」

スザク「レナードが？」

ルル「ああ。こいつなら実力も忠誠心も信頼できるから、と」

スザク「でもそれなら他の純血派の人でも」

ルル「俺もそう聞いたんだが、ヴィレッタとキューエルではラウンズにするにしても技量が足りないらしい。ラウンズは功績じゃなく、必要とされるのは純粋な実力だからな」

スザク「へえ」

皇帝「ラウンズとは皇帝直属の最強騎士。そこに、弱者は要らぬッ！　オール・ハイル・ブリタニアッ！」

ルル「さてこれだけでも何だからな。レナードに対する当て付けも含めて、このVTRをお送りしよう」

帝都ペンドラゴン内にひっそりと佇む小さな、けれど不思議と気品を感じさせる小屋。

そこに帝国最強の名を冠した騎士の中の騎士、ブリタニアの魔人と畏れられる男ナイトオブワン、レナード・エニアグラムはいた。対面するのは一人の女性。元ナイトオブツイーにして元特務総監ベアトリス・ファランクス。

「そのマント……………ナイトオブワンになってのね、レナード」

嘗てレナードがナイトオブツイーだった時のようにラウンズの番号ではなく名前でベアトリスは言った。特務総監という職から退いたせいだろつか、それとも親愛からか。

レナードとしては後者だと信じたい。

「ああ。マントこそバルトシュタイン卿の纏ったものと違うが、色もそして誇りも同一の、俺の誇りだ」

「という事は、もう私のお古は纏わないのね」

それは事実だ。

レナードはもうナイトオブツイーではない。ベアトリスの後釜ではないのだ。

だからもう黒いマントを纏う事は、二度とない。

「ベアトリス。勘違いしないでくれ」

「勘違い？」

「確かに俺は、貴女から受け継いだ黒いマントを二度と身にまとう事はない。けど、あの時、ラウンズとして任じられた時に、貴女から受け継いだマントは、今も尚その誇りと騎士道と共に、心に纏っている。身にまとう事は二度となくとも、心に纏ったマントを外す

事は永劫ない」

「ふっ。相も変わらず気障な言い回しを好むわね」

「気障でなくては騎士なんてやってられないだろう？」

「それも……そうね」

弱弱しくベアトリスが微笑む。

懐かしい。彼女の笑みを見たのは本当に久しぶりだった。

「形としてあるマントは、やがて他の、新たなるナイトオブツーに受け継がれるだろう。先代と先々代、いやその更に先代。俺があの時、マントに籠った誇りを受け継いだのと同じように」

「新たなるナイトオブツーは決まっているのかしら？」

「隠し事は出来ないな、ベアトリスには。……………今は陛下にしか知らぬ事だが、俺はジェレミアにやって貰おうと思ってる」

「ジェレミア……オレンジ事件の？」

「俺の後釜だからな。信頼できる男に任せたい。ジェレミアは多少阿呆だが、忠誠心は人一倍だし、実力もある。特殊な事情もあるから、一般の騎士と同じ扱いは出来ないしな。適当に功績をあげさせて、機会を見てラウンズ入りする事になるだろう。これは陛下も了承済みだ」

「そんなもの私に言っているの、エニアグラム卿。私がルルーシュ陛下の母君に何をされたか、知らぬ訳ではないでしょう？」

「ルルーシュ陛下を恨むのか？　ならこの場で俺の首を切れればいい。皇帝陛下の右腕にしてナイトオブワン、復讐の代理としては相応強いぞ」

「生憎ね。私はロストソード。剣は持たない」

「剣を持たぬ騎士、か。だがベアトリス。気づいているか？」

「何に」

「剣を失い、特務總監を辞した貴女は、もう騎士ではない」

レナードは立ち上がると、慣れた動きでベアトリス・フランクスの唇を奪った。

短い唇を合わせるだけの接吻。

それが終わってもベアトリスは冷静だった。

「だから女になれ、とでも言うの？　この半年も生きられない、この死にかけに」

「構わないさ。俺も明日の命も分からぬ身。ならば那由多の愛に身を沈めるのも、また良いだろう」

「……………本当に、気障な男ね」



ルル「以上、VTRをお送りした」

[illegible]

ルル「どうしたスザク、五月蠅いぞ」

スザク「いや、ちょこれ、プライバシーとかは……」

ルル「生憎だな。ブリタニアは絶対君主制。言うなれば俺が法だ」

スザク「原作じゃ民主主義思想だったんじゃ」

ルル「細かい事を気にするな。こういう場だ」

スザク（もう嫌だこの職場）

皇帝「流石は我が騎士レナード。騎士の営みというものを理解しておる」

スザク「でもレナードってナナリーが……」

皇帝「ふつ。情弱な民主主義国家風情と我がブリタニアを同列に見るな。強者たる帝国騎士ならば複数の女性を侍らすなど至極当然。農も妻１０８人おるし」

スザク（あーうぜえなこの爺。こっちは某シスコン皇女のせいでデ  
ート一つにすら監視がつくのにな。これが究極のリア充っていうんだ  
ろうな）。結局、男は顔でも性格でもなくて、金と権力なのか）

【戦後の黒の騎士団とかの処分はどうなったんでしょう？  
原作では、少しだけその後の彼らが出てきた訳ですが……

今一度確認してみんですが、例えば、ラウンズで結果的に裏切った一人ドロテアって最期が見当たらないような……

彼女結局、どうなったんでしょう？

また、カレンや藤堂、扇なんかはどうしたって責任者や最前線に出ていた以上何も処分なし、って訳にはいけないと思うんですが、その辺はどうなのでしょう？ 幾らギアスがあつたって、それだけじゃ他の人は納得出来ないでしょうし  
【簡単な概略だけでもいいのでお願い出来ませんか？】

スザク「ええと、これいいんですか？ 一応本編後の質問は却下と  
いうことになってますけど……」

皇帝「いや儂途中で死んだから未来とか知らぬし」

スザク（なんかカリスマブレイクしちゃってるな皇帝陛下）

ルル「まあ確かに本編後の話だが、軽い概要くらいは前もってこの  
場で語るつもりだったからな。問題ないだろう」

スザク「ルルーシュがそういうならいいけど………それで戦後は  
どうなったんだい？」

ルル「先にブリタニアのほうの事情から説明しておくが、ドロテア  
はラウンズとしての地位を剥奪。だが彼女もシュナイゼルに騙され

ていた訳だからな。そう思い罪にはしなかった」

スザク「じゃあ黒の騎士団は」

ルル「それは俺よりもこの男が語った方が早いだろう」

藤堂「久しぶりだなスザク君」

スザク「と、藤堂さん!？」

ルル「アーサーが亡きあと、敗戦処理を行ったのは藤堂だからな。俺よりも適任だろう」

藤堂「もしも騎士団が敗退した時は、ゼロより後の事を頼まれていたのだな。私も幕僚長として、ゼロの部下としての義理を果たしたまでだ」

皇帝「ミスター・ブシドーということだな」

スザク「陛下……それはギアスじゃなくてダブルオーですよ」

ルル「そんな事はどうでもいい。それで藤堂、戦後の黒の騎士団はどうなった？」

藤堂「解体、だな。黒の騎士団だけではなく超合衆国も。ちなみに扇は出番すらなく適当な戦いで適当に死んだ。作者曰く『書きたくもなかった』らしい」

スザク「脇役以下は放っておいて。で、肝心のカレンや藤堂さん、日本は？」

藤堂「カレンは幾らエースといつても所詮は一兵卒。強いて言うなら親衛隊隊長だが、大した罪には問われない。どこかの生徒会一同が皇帝に懇願した事もあって」

スザク「ルル・シュ……」

ルル「べ、別にカレンの為にやった訳じゃないんだからな！」

皇帝「ツンデレルーシュw」

ルル「ええい貴様は黙っているツ！ それ以前にキャラが崩壊してるぞ！」

皇帝「ぶるあ ああああああああああああああああああああ

スザク「あ、元に戻った」

藤堂「話を戻すが、私は粗方の敗戦処理を終えたと職を辞した。幸い戦犯として処刑、という事にはならなかった。超合衆国は解体されたが、日本がブリタニアに無条件降伏した訳ではなかったからな。その後の日本とブリタニアの関係は………第二次太平洋戦争後の日米関係を想像してくれるとありがたい。幸い桐原公とルルーシュ皇帝に面識があつたからな。私は隠居して、田舎で道場の師範になつたよ」

スザク「つまり日本も戦後は平穏、と」

藤堂「まあ、そうだ」

【主任に質問】

主任「どうぞ」

スザク「凄い何時の間に此処に……」

皇帝「主任、儂コーヒー飲みたい」

主任「用意してあります」

スザク（本当何時の間に現れたんだろ）

主任「こういう場ですから」

スザク「万能ですね、その言葉」

『・主任さんがアーサー王の剣からレナードを庇った時等その他も含め、行動の基盤に有ったのは、「尊敬」「奉仕」「好意」「愛情」「目的」もしくはこれ以外のものだったのですか？  
・レナードとの出会い、また小説内の様な関係になった詳しい出来事を知りたいです』

スザク「また重い質問が。主任さん、ええと大丈夫ですか？」

主任「強いて言うなら『目的』であり『理想』であり『完璧』です」

皇帝「興味深い。聞こうか」

主任「私はこれでも貴族でこそありませんでしたが、ブリタニアのちよつとした富豪の生まれです。それでこういう言い方をすると傲慢ですが、私は他人より遥かに頭もよかったので、幼い頃より神童と呼ばれてきました」

スザク「それ僕もあります。武術の先生が君は神童だって」

主任「なら枢木卿にも分かるでしょう？ 余りにも飛び抜けた天才児というのは、大抵は孤独を味わうと」

スザク「確かに……………僕もルルーシュとナナリーが家に来るまで、碌に友達もいなかった」

主任「私は完璧でした。頭も良かったし、運動も出来た。人間関係も……………人間心理は心得ていたので問題はなかった。だけど完璧な人間なんてそうはいません。能力的には素晴らしくても、情や精神の部分が脆い人間、強固な精神があっても能無しな人間は多くても、心技体の全てにおいて完璧な人間は存在しなかった。けど私も愚かなもので、完璧な人間がいらないなら自分で作ればいい、と考えたのですよ」

スザク「それって……………」

主任「遺伝子操作やサイボーグ、一般的に非人道的とされる研究を

行い、結果として医学界から追放寸前までいきました。寸前でギアス嚮団から勧誘されなければ、本当に私は学会から追放されていたでしょうね」

皇帝「兄さんからの報告では、主任が嚮団に加わった事で研究も大きく進んだらしい。その成果の一つがイレギュラーズの使っていたギアス能力者専用KMFであり、最終話辺りに関わってきた魔道器R・R・だ」

スザク「でも、どうしてレナードの専属開発チームに移動したんですか？ 嚮団で凄い結果を出していたのに」

主任「ギアスという超常の力をもつてしても、完璧な人間は作れなかったからです。だから人間ではなくて最強の陸上兵器であるKMFに完璧を求めたんです」

スザク「そして」

主任「私はあの方に出会った」

皇帝「主任をレナードの専属にするよう命じたのはマリアンヌだ。嚮団の実験ではどうやっても人工的にワイアードギアス能力者を作り出す事は不可能だったのだ。レナードはワイアードとして覚醒するか否かの、謂わば自然成長実験的な意味合いがあった。戦場という極限空間での成長。それに嚮団とマリアンヌは期待したのだ」

スザク「じゃあ主任さんはレナードの監視のために？」

主任「今となつては、それが転機でした」

スザク「転機というと」

主任「レナード・エニアグラムという存在は、完璧だった。一度命を受ければどのような困難な任務も成功させ、結果の為ならば部下や肉親すら切り捨てる非情さを持ち、権力の中枢で上手く立ち回る器用さも兼ね備えていた。尤も閣下は貴族、下々の仕事である家事などという事は疎かった。だからこう思ったのですよ。私があの方の一部となれば、レナード・エニアグラムは本当の意味で『完璧』になれると。これがレナード・エニアグラムという存在が私の『目的』であり『理想』であり、そして一部となった『理由』です」

『貴女は幸せでしたか？』

主任「当然です。私にとっての不幸はあの方に出会わない事ですょ」

スザク「以上、主任さんからでした」

皇帝「漸くまともな質問コーナーとしての役割を果たしたようだろう」



【レナードの生身での射程距離って？  
物語の中で、2000m以上を雨の中で狙撃したって場面がありませんが、レナードって生身での射程距離ってどんなもんなんでしょう？  
ゴルゴすら超えてるような気がしますけど……やはり、銃の射程距離  
内なら百発百中？】

スザク「確かにレナードが狙撃を外しているのを見た事ありませんし、どうなんでしょう？」

皇帝「……………準備が整ったようだな」

スザク「え、準備？」

スザクが怪訝な顔をする。

その時だった。突然、会場となったホールの照明が落ちた。

スザク「これはっ!？」

真っ暗で何も見えない。

まさか真っ暗なだけに枕でも降ってくるのか。

スザクが滅茶苦茶な思考をしていると、パッと明かりがついた。  
眩い光にスザクは思わず手で顔を覆う。

やがて目が慣れてくると、漸くホールの光景が脳裏に飛び込んできた。

スザク「そんな……………馬鹿な」

ホールの扉から歩いてきたのは、紛れもなくレナード・エニアゲラムだった。ラウンスの純白の騎士服とナイトオブワンの証である純白のマントを羽織り、堂々と優雅に歩いてくる。

だがレナードは一人じゃなかった。傍らに一人の女性がいる。

スザク「……………ナナリー」

それは嘗て死んだナナリー・ヴィ・ブリタニアだった。

いやそれは凄いことじゃない。なんといってもこういう場所だ。とつくに死んだシャルル皇帝だって元気にキヤラ崩壊している。今更ナナリーが来た所で変な事はない。

明らかに違うのは唯一つ。ナナリーの服装だった。

声を失う。

ナナリーが着ているのは少女なら一度は夢見るだろう純白のウェディングドレス。

ギアスの呪いもなく、足の怪我など忘れてしまったかのように、皇族に名を連ねる者らしい高貴な歩き方をしている。

レナード「ようスザク、お久しぶり。最終決戦以来だな」

ナナリー「お久しぶりです、スザクさん。元気な姿で会っるのはアッシュフォード学園以来ですね」

スザク「え、うん久しぶり……………けど、これは一体……………」

ルル「やれやれ来るのが遅いぞ」

皇帝「我が騎士らしい在り方だ」

主任「遂にこの時がきましたか」

コーネリア「ふっ、我が義妹ながら似合っているぞナナリー」

ユーフェミア「本当に可愛いわよ、ナナリー！」

オレンジ「おおおおおおおナナリー殿下あああああああああああああ！」

QL「黙れオレンジ」

ヴィレッタ「そろそろ私も結婚しないと行き遅れるな」

藤堂「目出度い」

マリアンヌ「流石は私の娘ね」

フランカ「どうせ私は第一部のやられヒロイン……」

デューク「なら俺が……」

フランカ「ん、何か言った？」

デューク「

」

C・C・「ゴールインか。遅かったものだ」

シャーリー「恋はパワーだよ！」

会長「よっ！ 世界一っ！」

リヴアル「お幸せにー！」

眼鏡「……私も……ユーフェミア様と……ぐふふふふふ」

ルキアーノ「あー、その幸せ私の手で是非とも奪いたいが……友情とやらに従って止めておこう」

ノネット「私も姉として鼻が高い！」

アーニヤ「頑張れ、ナナリー」

ビスマルク「マリアンヌ……様」

ライ「僕の出番が漸く」

切嗣「何で僕まで此処に？」

レナルド「上に同じく」

垣根「以下同文」

スザク「もしかして知らなかったの僕だけ！？　なんか関係ない人達まで混じってるし」

レナード「気にするな。この界限じゃ良くあることだ」

ルーミア「そーなのかー」

スザク「なんか微塵も関係ない人いましたよね！？」

レナード「だから気にするなというに」

ナナリー「難しく考えると長生きできませんよ……………私みに」

レナード「そうだぞ俺みたいに」

スザク「洒落にならない」

皇帝「レナードよ。お前もこれで晴れて我が一族の末席に座る、か」

レナード「お許しを頂けますか、先帝陛下」

皇帝「良い、許可する」

レナード「感謝の極み！」

スザク（あれ僕の時と対応違う……………やはり世の中家柄なのかなー。そうだな。日本なら兎も角、ブリタニアじゃ僕はただの外国人の騎士侯、対するレナードは軍総帥兼次期公爵兼ナイトオブワンだからな。せめて僕が原作通りナイトオブセブンなら。でもそれだとユフィの騎士になれないし。どっちも蟻地獄）

マオ「おや良からぬ事を考えているみたいだね枢木スザク」

スザク「！」

ルル「マオ！ お前は黙っている！」

マオ「しまっ

もがもが……」

マオ（声が出ない）

スザク（やばい。話が脱線してきている。僕がなんとかしないと……）

スザク「それでレナード、質問の事なんだけど？」

レナード「俺の射程距離の話だろ？ そうさな。顔や体型によるが下は十四、上は三十八。かなり範囲は広い」

スザク「そっちの射程距離じゃなくて狙撃の射程距離だよ！」

レナード「ジョークが分からない奴だな。ブリタニアジョークじゃあないか？」

スザク「悪かったね。僕、日本人だからブリタニアジョークは分からないんだよ」

レナード「おおおう、なにか怒ってるみたいだ。もしかして、ユフイと上手く言ってないとか？ 駄目だぞスザク。女は男がリードしないと。そんなんだから至る所でウザク呼ばわりされるんだぞ」

スザク「……………それで質問のことだけど」

レナード「スルースキルを覚えたのか、スザク」

スザク「質問のことだけど！」

レナード「はいはい分かった分かった。狙撃の射程距離だろ？ なら早い。弾丸が届く範囲なら的が動いていようと止まっていようと当たる、以上！」

スザク「えっ、それだけ？」

レナード「相手がアーサーやラウンズクラスとなると別だがな。ま、臨戦大戦じゃなくて寛いでいる時ならラウンズだろうと一発だ。アーサーのような規格外や、どこぞの不死者のようなのは殺せないが」  
ルーミア「そーなのかー」

スザク「もう気にしない事にしたよ。某東方でプロジェクトな登場キャラクターのことは」

【レナードの子供っていなかったんでしょうか？

あんだだけ大量に女を世界のあっちこっちで作るわ、あんだだけ伝説になるわ、実家は裕福わでなら、絶対にどっかで隠し子騒動とか起きたような気もするんですが……

それこそ、なりすまし、みたいなケースや、「エニアグラム卿と関係しました。この子は彼との子です」なんて話もありそうな気がします

百発百中の彼ですが、さすがにそっちは気をつけてたとは思いますが、本当にいなかったんですかね？」

スザク「レナード、もしかして？」

レナード「失敬な。俺は避妊処置はしっかりする男だぞ」

スザク「でも、もしかしたら……」

レナード「ふう、これだから童貞ボーヤは」

スザク「童貞は関係ないッ！」

レナード「良かったな。そのまま三十過ぎれば魔法使いになれるぞ」

スザク「なりたくないよ！」

レナード「HELLSING的な世界観なら吸血鬼にもなれる」

スザク「それも嫌だ！ アンデ セン神父に殺されそうで！」

皇帝「我らは神の代理人

神罰の地上代行者

我らが使命は

我が神に逆らう愚者を

その肉の最後の一片までも絶滅すること

A m e n  
」

スザク「中の人登場！？」

皇帝「いいですか 暴力を振るって良い相手は化け物どもと 異教徒どもだけですよ」

レナード「良かった、俺異教徒じゃなくて。そしてサヨウナラ。異教徒の枢木スザク」



スザク「ちょ、「冗談だよー!？」」

レナード「まあまあ心配するな。俺の出演している作品にはな。しつかりとアー　ードもいるんだ」

麻婆「食うか？」

皇帝「食べよう」

レナード「な？」

スザク「凄い。ア　カードとアン　ルセン神父がマーボー豆腐食べてる」

レナード「それで質問のことだが……」

スザク（なんか今回の企画、毎度毎度脱線してばっかだ）

レナード「俺に子供がいるのか、とな。これには一から説明する必要があるみたいだ」

スザク「どうしたのサングラスなんか装着して」

レナード「気分だ。これで俺もクトロ」

スザク「会いたかった、会いたかったぞ！ガンダムツ！！

レナード「それでだな……」

スザク（無視された！？）

レナード「いいか？ 18歳以上の読者の方々の中には、エロゲやエロアニメを趣味している人がいるかもしれない。そういった作品の中で稀にヒロインが」

カレン「いいよ、今日は……大丈夫な日だから」

レナード「とか中出しOKみたいな事言ってくるのが多々ある」

スザク「カレン、どうしてこんな事を……」

カレン「出番が欲しいからよ」

レナード「他にも男性キャラが」

ジノ「くう中に出すぞ！」

レナード「とか言う場合も多々あったりする」

スザク「ジノ……君まで」

ジノ「出番が、欲しかったんだ」

レナード「そして最も多いパターンが外出した。要するにコンドームつけずに出陣して、出すものは外に出すってことだ」

スザク「これって十八禁なんじゃ……」

マリアンヌ「性教育の授業だからOK」

レナード「だがなその一番多いパターンにも落とし穴がある。外に出せば別によくね、とか思っているのは大間違いだ。やってる途中の俗にいう『我 汁』も精 だからな。可能性は低いが、最悪の場合デキてしまう事もある。安全日だから、というのも論外だ。女に絶対安全な日など現実には存在しないのだ」

ルル「なんかガチな性教育始めたなこいつ」

レナード「いいか？ 俺のように絶対君主制の次期公爵及び軍総帥なら事実の揉み消しなんてお茶の子だが現実はそのはいかない。中出し＝責任とれ、になることを頭に入れておいた方がいい。しかもこれが未成年とかだと最悪だ。中出ししたら人生終了ですよ、ということだ。どうだ、分かったか諸君」

一同「はい、先生えー！」

レナード「よし。今日の授業はお終い。解散！」

スザク「それで子供はいるの？」

レナード「！」

スザク「性教育はよく分かったけど質問には答えていないんじゃないんじや……」

レナード「ふふふふっ、覚えておけスザク。女とは男が思う以上に狡猾で、そして執念深いのだ」

スザク「というと」

レナード「あれはまだ俺が穢れをあんまり知らなかった頃、俺にとつては遊びだったんだが、相手の方が本気にした時があつてだな。あの手この手を使って迫ってきた」

スザク「もしかして……」

レナード「意図的に穴をあけられたのだコンドームに」

スザク「……………」

レナード「事实は軽く揉み消して、その女には日本円にして五十億ほどくれてやったが、驚くべきことにヤンデレとかしてな」

スザク「どうなったの？」

レナード「包丁やらチェンソーやらで襲い掛かってきたが、そんな脆弱な武装でラウンズのこの俺に勝てる訳ないだろう。軽く撃退してやった」

スザク「それで、終わり？」

レナード「いや最初はチェンソーだったのが、時が経つにつれて拳銃、ライフル、バズーカ、対戦車ミサイルとランクアップしていったな。一度市街地でKMF乗り回してきて、流石の俺も庇いきれず警察に捕まった。裏に金をまわしておいたから死刑になる事はなかったが、そいつが釈放される頃には俺はもう死んでたから無問題だ」

スザク「ごめん。こんな時どんな顔をすればいいのかわからないん

だ」

レナード「…笑えばいいと思うよ」

ナナリー「苦笑い、ですけどね」

スザク「あははははは…ははっ……………はぁ」

ナナリー「溜息つくと幸せが逃げますよ」

スザク「というか、レナード何でエロゲとかの日本文化知ってんの？もしかして趣味がエロゲとか」

レナード「んな訳あるか。日本語すら喋れない俺が日本文化を知っている訳がないだろ。俺にとっての日本のイメージはニンジャ、サムライ、ハラキリ、スキヤキ、サクラダイトくらいだ」

スザク「なんて間違った日本」

レナード「ところで日本人ってちょんまげヘアをしているんじゃないのか？」

スザク「…駄目だこいつ…早くなんとかしないと…」

レナード「大体、俺だぞ？　そういったゲームやらをするくらいなら娼館にでも行くって」

スザク「主人公とは思えない発言」

レナード「主人公らしからぬ主人公、だからな」

スザク「司会なんて引き受けるんじゃないかった」

【原作世界では復活していないアーサー反逆しない軍人の世界では復活しているのに何か理由があるのでしょうか？】

アーサー「さて、この質問だけは他の者に任せる訳にもいくまい」

シュナイゼル「そうだね。何しろこの話の。いや君の根幹に関わる事だ」

アーサー「これは裏中の裏。秘中の秘。当初よりあつたにも関わらず、結局公開することなく闇に葬られた設定だ」

シュナイゼル「勿論実際の歴史やアーサー王伝説には全く関係ない事を頭に入れておいて欲しいね」

アーサー「最終決戦で私を破ったレナードだが、その後に彼が辿る末路は大きく分けて二つある」

シュナイゼル「一つは本作品通りの消息不明になる終わり方。現実世界から黄昏の間からも消失する、正真正銘の行方不明END」

アーサー「そしてもう一つが、魔道器R・R・を破壊した際に偶発的にコードの一つ、元々私が保有していたコードを受け継ぎ、黄昏

の間より過去に遡ってしまふ、所謂逆行E N Dだ」

シュナイゼル「ただし逆行といっても近い歴史じゃない」

アーサー「レナードが逆行したのは彼方の過去。アーサー王伝説が始まる前の過去だ」

シュナイゼル「ただタイムパドックスの一種だろうね。過去へと遡ったレナードは記憶を失ってしまった。ブリタニアという国家も、レナード・エニアグラムという名前すらもね。未来の情報のほぼすべてを彼は失ってしまったんだ」

アーサー「そして名を失った彼が最初に見たのが、共に飛ばされてきたマーリンであり、モニターに映った『Merlin Ambrosius』という文字列。彼はこれを自分の名前だと誤認したのだ」

シュナイゼル「ここまでくれば勘の良い読者はお分かりの事でしよう。つまりアーサーの回想に登場したマーリンは過去へと逆行し、数多のコード保持者と同じく摩耗したレナードそのものであることを」

アーサー「私とレナードは表裏一体だ。レナードが逆行すれば私もまたギアス世界に関わる事になるが、逆行しなければ原作通りの世界観になる」

シュナイゼル「もしかしたら、マーリンがアーサーに入れ込んだのは、レナードとしての記憶が無意識下で残っていたからかもしれないね」

アーサー「しかしマーリンも死んだ。私も死んだ。そして今回レナードは逆行しなかった」

シュナイゼル「となると次のギアスは原作と同じか、或いはレナード・エニアグラムという異物が混じりながらもアーサー・ペンドラゴンの存在しない世界か」

アーサー「それは、まだ」

「「誰にも分からない」」

【反逆のしない軍人、の最後の、レナードの死を書いていてどう思いましたか？】

劉禅「ラストにして漸く作者本人への質問ですねー」

垣根「何で俺がここにいんの？」

劉禅「こういう事は『反逆しない軍人』とは全く関係ない人間を相方にした方がいいと思って」

垣根「だからって俺を呼んでんじゃねえよ。俺は『とある魔術の未元物質』で忙しいんだよ」

劉禅「まあまあ。恐らく最初で最後の台本なんだから」



垣根「まあいいや。で、どう思ったんだよ。レナード死亡END書いて」

劉禅「……………嫌な気持ちはしませんでした。レナードはかれこれ百話以上の付き合いですし、私自身の生み出した息子のような存在ですからね。本音を暴露すれば、ルルーシュ達原作キャラよりも身近な存在ですから」

垣根「じゃあ何で殺したんだよ」

劉禅「それは作品を面白くする、という意味合いもありますし、なにより第四部からはアーサー王伝説を初めとした騎士道物語に強く影響を受けた事もありますね。他にも三国志や項羽と劉邦からも影響をもろに受けましたし」

垣根「英雄譚ってのは大抵が英雄の死で終わるからな」

劉禅「その通りです。なによりそれが一番盛り上がる部分とってても過言じゃないでしょう。アーサー王伝説ならばアーサー王の死。三国志なら関羽や劉備、諸葛孔明の最期。そして項羽の劉邦ならば文句なしに項羽の最期でしょう。霸王別姫など何度も京劇になつてますしね。私自身も拝見した事があります」

垣根「最期、か。原作ルルーシュもラストが壮絶だったからこそ『コードギアス』を一層輝かせた訳だからな」

劉禅「逆に最期がダラダラしていると盛り上がりが欠けます。三国志は諸葛孔明の死んだ時からわりとグダグダですし、劉邦に至っては疑心暗鬼に取りつかれ韓信死ぬわ、反乱勃発するわ、匈奴に追い

詰められるわ、お家騒動起こすわと散々ですからね。だから敢えて本作品もその後は書かず、レナードの死という一番盛り上がる所で終わってます」

【反逆しない軍人を書いていて一番気を使った所はなんですか？】

劉禅「難しい質問ですね」

垣根「そうか？ 正直に答えればいいじゃねえか」

劉禅「むむむ」

垣根「何がむむむだ」

劉禅「気を使った所というと……やっぱり原作キャラの性格を崩壊させないようにするとか」

垣根「なんか今回はかなり崩壊してるけどな」

劉禅「こういう場所は別」

垣根「こういう場だからな。仕方ねえか」

劉禅「あー、気を付けた所といえばあれだ。レナードですよ」

垣根「レナード？」

劉禪「レナード・エニアグラムというキャラクターは俗にいう憑依でも転生でも、そして日本人ですらありません。おまけに平民でもなく、名門エニアグラム公爵家に生まれた生粋の貴族です」

垣根「それがどうしたんだよ？　んなこと『反逆しない軍人』の読者なら誰だって知ってるっての」

劉禪「そう誰だって知っている。だけど日本人じゃない、というのが重要。つまりはレナードが食事をする前に『いただきます』とか発言したり、日本人にとっての常識に当てはめる事が出来ないんですよ」

垣根「いただきます、は日本だけの挨拶だからな」

劉禪「そうブリタニア貴族なら『偉大なる皇帝陛下の御名の下に』とかいうのが正しいでしょう。レナードに関しては徹底的に『日本人じゃないブリタニア貴族』というのを頭に入れて書きました」

垣根「それで生まれた設定が平等嫌いや民主主義嫌いつてことが」

劉禪「他にも実力主義だったり、年功序列というのも気にしないで年配にもガンガン命令しますし、基本的にブリタニア>他国人な考え方です」

垣根「スザクや藤堂辺りを認めていたのは？」

劉禪「単純に二人に実力があつたからでしょう。レナードの中では実力主義>純血主義となつていただけです。ちなみに社会主義とか共産主義は独裁が出来るから民主主義よりは好きという設定です」

【最後に……】

劉禪「これにて『反逆しない軍人』は終了となりました」

ルルーシュ「読者の方々にはこの場を借りて礼を言う」

スザク「司会は辛かったけど、なんとか終わらせることが出来ました」

皇帝「全てはこの儂あってこそ！」

レナード「今まで俺達の活躍を応援してくれてありがとうございました。読者の方々の応援なくして、百話の長編を完結させる事は出来なかったでしょう」

劉禪「尤も最初は感想が全然なかったんですけどねw 第一部の最初のほうなんて悲惨です。感想が三、四話に漸く一回なんていうのがザラでした」

ナナリー「俗にいう感想氷河期ですね」

レナード「ですがそれを含めた完結したのは、やはり大勢の読者の方々からの感想や応援あってこそです。俺は本来主人公のキャラじ

やありませんでしたが、それを含めて好き、と言って下さった読者の方々には感謝を。特に女性読者には愛を」

ルルーシュ「こういう場でもお前の女癖の悪さは直らないのか？」

ナナリー「レナードさん……」

レナード「そして我が最愛の女性であるナナリー・ヴィ・ブリタニアには最大の愛を」

ナナリー「……………もう」

スザク（なにこの桃色空間）

レナード「これで本企画は終了。お別れとなります」

ルルーシュ「だがまた機会があれば出会う事もあるだろう」

レナード「死した人々がこうして再び巡り合ったように」

スザク「だから今は」

レナード「次の機会まで暫しの別れを」

劉禅「それでは、最後はこの言葉で締めましょう！ 読者の皆様もご一緒に！」

『オール・ハイル・コードギアスッ！！！！！！』



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9681v/>

---

コードギアス 質問する軍人？

2011年8月21日02時53分発行